

地域銀行の顧客向けサービス業務部門と市場部門の収益分析

江戸川大学 杉山 敏啓

1. 地域銀行の市場部門収益への依存

本邦地域銀行は預貸率の低下、貸出金利回りが有価証券利回りを下回る状況等を背景に、有価証券運用を中心した市場部門収益への依存を高めている。地域銀行の収益性と有価証券運用業務との関係性を分析した藤井(2015)、八幡(2016)、重本(2017)などの先行研究は、有価証券運用の積極化は、地域銀行自身の収益性の向上に寄与することを示唆し、重本(2017)はビジネスモデルの持続可能性を模索する上での有力な選択肢であると述べる。

他方で金融庁は、地域銀行の本業とも言える顧客向けサービス業務利益の不振を問題視している。不足する収益を補うために有価証券運用業務への依存度を高めることは、経営体力と対比した市場リスクテイクが拡大して金融機関経営の脆弱性が高まる恐れがあり、ブルーデンス当局が懸念するところである。地域銀行にとって預貸業務を中心とした顧客向けサービス業務は本業であるとして、有価証券運用業務も今や本業ではないのか。

2. 部門別の収益構造

本研究は地域銀行の収益構造を市場依存の観点から確認するために、金融庁の顧客向けサービス業務利益の定義に準拠しつつ、財務会計科目を各部門に対応させる方法により、全行収益を顧客部門損益（信用コスト控除後の顧客向けサービス業務利益）と市場部門損益とに区分けし、2020年3月期を直近期としたヒストリカルデータを調査・分析した。地域銀行の「経常利益に占める市場部門の割合」は、2015年3月期の72%から2020年3月期には99%へと非常に高まっている。こうした収益構造を鑑みても、地域銀行は顧客部門と市場部門の二大収益部門を営む会社として捉えることが実態に即していると言える。

地域銀行において、顧客部門が赤字で市場部門が黒字という先が6割で今日では多数派であるが、片側エンジン飛行のような経常利益の生み出し方が常態化してしまうと、市場部門サイドに強い収益プレッシャーがかかり、市場リスクアペタイトが慢性的に強まる点がストレス耐性の見地から心配される。

3. 二大収益部門の相互関係性

パネルデータによる分析を通じて、顧客部門 ROA と市場部門 ROA の間には逆相関の関係性がみられ、片側の損益不振をもう片側の損益でカバーする傾向が示唆された。顧客部門が累積赤字である地域銀行は、市場部門 ROA および市場部門 ROA のリスク・リターン比が相対的に高く、市場部門のパフォーマンスを追求している可能性が窺われた。銀行の裁量で益出し等に使われることがある債券5勘定戻に対して、顧客向けサービス業務利益の対前年度比増減額ならびに当年度の信用コストは有意にネガティブ関係であり、これらの損失拡大に際して相殺手段として使われている可能性が示唆された。なお債券5勘定戻と株式3勘定戻との間には逆相関の関係性が示唆された。

以上